



ち え の わ Vol. 6

## 新内節について

会員 若林 擴



新内節は、豊後節浄瑠璃の流れを汲む、語り物音楽の一系統であります。浄瑠璃は、三河の国に伝えられていた浄瑠璃姫と牛若丸のラブロマンスが、語り物としてもはやされるようになり、この浄瑠璃姫の名前から、三味線を伴奏としたこの種の語り物音楽を「浄瑠璃」と総称するようになりました。

中国の楽器三弦（サムツェン）が琉球に渡来し、永禄五年（1562年）琉球から堺の町に三線（サンシン）又は蛇皮線として伝えられ、琵琶法師の中小路により弾き爪が「撥」に、蛇の皮は「猫の皮」に代えられて三味線が開発されました。これを伴奏楽器に取り込んだ浄瑠璃は、江戸時代の革新的な新音楽となり、演奏者は独自の節を考案してそれぞれ一派をたてて競い合いました。

その中の豊後節はその哀調を帯びた語り口が受けて、江戸市中で大流行致しました。その哀調を帯びた艶やかな表現が公序良俗に反するとして、幕府により全面禁止となる憂き目も見ましたが、やがて、常磐津、清元、新内等に別れて生き残りました。

特に豊後節の特徴を最も巧みに受け継いだのが新内節であると云われています。あまりにも哀調を帯びたその節回しに誘われ、吉原では心中が流行ったそうです。

後に新内節は劇場音楽から離れ、座敷浄瑠璃や街頭に進出して、「新内流し」等の特色を出し、庶民の根強い人気を得るようになりました。

吉原を代表とする遊里の里を「流す」と、芸妓、客の心を掴み、ちり紙にお金をくるんだ「おひねり」の形で投げられ、現金収入を得られるようになりました。

中身を取り出し、ちり紙だけを元のままに置いて、後から来た同業者に、ここはもう済んだと、無駄な営業を止めて通り過ぎる目印としたそうです。

明治から大正にかけて寄席等で再び大流行した新内に題材を取って、川口松太郎が「鶴八・鶴次郎」を新派に書き下ろし、大当たりを取りました。歌舞伎では中村宗十郎が「蘭蝶」を家の芸として、歌舞伎座で上演されるときは、当時の名のある新内の師匠連中が張り出し床で、三味線及び浄瑠璃を相務め評判を取りましたが、惜しくも先年亡くなり、後を継ぐ者も無く現在は途絶えてしまいました。

昔はといっても、つい太平洋戦争前までの話ですが、下町では、花街でなくとも、町内に小唄、長唄、清元、常磐津、義太夫等の邦楽又は踊りのお師匠さんの一人

や二人は居たものです。

町内の娘、若旦那、隠居等を教えて、そこそこ生計を立てていましたが、そうそう舞台があるものではなく、収入では、座敷浄瑠璃や流して荒稼ぎする新内語りには敵わなかったに違いないし、新内語りも弟子を取るより現金を稼げる営業に力を入れる結果となったようです。

新内語りは高音の美声を競い、各人が独特の節回しを編み出して演奏するため、同じ曲でも唄い方が極端に異なる個人技の世界となりました。「流し」などの個人営業に力を入れ、劇場を離れたので、新内は一般に馴染みが薄く、習う人の数も圧倒的に少なくなり、いつのまにか少数派になっていったものと思われま

す。戦後花街が廃れテレビ時代の影響で寄席の数が減り、新内流しの営業場所も少なくなるだけでなく、聞く耳を持たない客が増えてきました。

劇場音楽を離れて、「流し」等の個人営業に力を入れた「つけ」が回り、やがて新内節を演奏する粋な場所が無くなりました。

時代が変わり、本来新内演奏浄は瑠璃の太夫と三味線弾きの本手と上調子の基本構成によるものが、上調子と本手弾き語りの二人流しでお金を稼いだ事が「門付け」や「乞食」の類のように思われるようになり、映画やテレビの劇中の新内語りや、遊びの果ての若旦那と足抜きした花魁、芸妓の成れの果てのような、哀れで情けないイメージを残してしまいました。

近年、浄瑠璃の太夫、三味線の本手と上調子の基本構成に戻って、優れた新内の師匠達は、劇場での演奏に力を入れ始め、新曲を発表し、落語を題材にしたり、踊りや人形と組み合わせたりしています。日本一の美声を誇る女流名人鶴賀須磨之助が、気品のあるその歌唱法で新内のイメージを変えました。新内三味線で初の人間国宝となった新内仲三郎が他の分野の音楽とジョイントして新機軸を出し、同じく新内浄瑠璃で同時に人間国宝に選ばれた鶴賀伊勢太夫改め鶴賀若狭丞の車人形との共演のように意欲的な多数の名人を輩出しております。

若くて、器量良しで、美声、優れた三味線の腕を持った、浄瑠璃を語るだけでなく、三味線を弾くだけでもない、引き語りが出るヤングスターが生まれたら、この美しい伝統音楽の新内はブームを起す事でしょう。

(原稿受領 2003. 12. 15)